

2022年度 奄美大島研修 実践報告

石川 茂典 (保健体育科)

影山 彰 (理科)

1. はじめに

本校では60期生の2年次、2023年度（2024年1月）から研修旅行が5コース制となり、生徒たちは沖縄、東北、韓国、マレーシア、奄美大島のうちから1つを選択して参加することになる。このたび、2024年の研修旅行での奄美大島コースの実施を見据え、58期生（高校3年生）、59期生（高校2年生）から希望者を募集し、2022年8月26日から29日まで現地研修を先行で実施したので、報告させていただく。

現地研修日程：2022年8月26日（金）～29日（月）

引率：石川 茂典（保健体育科）・影山 彰（理科）

参加生徒：29名（男子3名、女子26名）

本校は、土曜日の3・4時間目に「土曜講座」を設置している。土曜講座は、高校の通常カリキュラムとは別にさまざまな選択講座が用意されており、生徒は各自の興味、関心に応じて履修することができる。今回は、土曜講座で奄美大島研修の事前学習講座を開講し、研修の参加希望者に履修してもらうことで、2022年4月から7月に事前学習を実施することができた。

2. 奄美大島の背景

奄美大島を含む「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島（奄美・沖縄）」は、大陸などとの分離、近隣島しょとの分離・結合を繰り返して形成された独特の地史を背景に、世界的にも貴重な固有種や、絶滅のおそれのある動植物の生育地として非常に重要な地域であることから、世界自然遺産候補地として推薦され、2021年7月26日に世界自然遺産として正式に登録された。¹

この地域の世界自然遺産登録が認められた理由として、「生物多様性」がある。奄美大島の広さは国土の面積の0.2%に満たないが、島内で国内全体の生物種の約13%が確認されている。

このように、固有種の宝庫であるがゆえに世界自然遺産登録が認められたものの、奄美大島は多くの問題を抱えている。以下に、奄美大島が抱えている問題の一例を示す。

- ・観光客の増加により、奄美大島の地域住民の生活や自然環境に悪影響が及ぼされる「オーバーツーリズム」が発生していること。
- ・観光客の増加により、奄美大島の固有種であるアマミノクロウサギ等の動物が車両に轢かれて死ぬ「ロードキル」が増えていること。
- ・島内に大学がなく、雇用も少ないために若者が島から流出し、大島紬などをはじめとする奄美大島の伝統文化の継承が難しくなっていること。

今回、生徒たちは事前学習でこれらの問題について調査し、現地研修を通して問題の解決策について自分たちで考えることができるように探究学習を計画した。

1 webサイト「のんびり奄美」より引用

<https://www.amami-tourism.org/natural-heritage/>

3. 事前学習

事前学習の内容は次の通りである。

第1回 2022年4月30日(土)「アイスブレイク、自己紹介」

アイスブレイク、自己紹介および、奄美大島のPR動画「命むき出し」糸編²の視聴をした。最初は緊張していた生徒たちも、時間が経つにつれて少しずつリラックスしていった。また、ゴールデンウィーク中の課題として、下の24のキーワードのうちから1つについて、研修生29名全員が調べて動画を作成するよう指示をした。

2 <https://www.youtube.com/watch?v=8ngz10SUdo4>

24のキーワードは次の通りである。

・奄美大島の位置と地形的特色	・奄美大島の気候	・奄美大島の文化
・奄美大島の歴史	・奄美大島の言葉	・世界自然遺産って何？
・世界自然遺産になった理由	・世界自然遺産の登録延期について	・奄美の教育機関について
・奄美大島の固有種(動物)	・奄美大島の固有種(鳥)	・奄美大島の固有種(植物)
・奄美大島の産業	・大島紬について	・奄美大島と自衛隊
・海洋ごみについて	・奄美大島とハブ	・奄美大島とマングース
・奄美大島と野ネコ	・マングローブって何だ	・奄美大島の環境政策
・奄美大島と沖縄	・オーバーツーリズムについて	・奄美大島とSDGs



第1回事前研修（2022年4月30日）の様子

第2回 2022年5月14日（土）「問いを立てる。グループ分け」

生徒が24のキーワードについて作成した動画をお互いに視聴し、感想を共有した。その後、これから自分たちが現地で調査してみたいこと「問い」を考え、問いの内容が近い人同士でグループを作った。また、次週以降の事前学習で行う「オンライン学習」で現地の方に質問したいことについて話し合いを実施した。

表 生徒が現地で調べてみたいテーマ(問い)および、グループに所属した人数

調べてみたいテーマ（問い）	人数
観光地化に対する政策/観光行政	4名
学校教育/子どもの様子	2名
自然環境を守る仕組み	2名
生物多様性（固有種・外来種の駆除）	7名
世界遺産登録の影響/島民の意識	6名
島民の生活（大島紬などの伝統文化/方言とのかかわり）	4名
島民の生活（奄美大島での暮らし/意識など）	4名

第3回 2022年5月21日(土)「第1回オンライン学習」

奄美テレビの福山亜希子氏から、奄美大島の文化について、ロードキルの問題について、奄美大島の自衛隊の話についてなど、多岐にわたってお話を伺った。

質疑応答の時間では、奄美大島の文化・教育・自然遺産保護への取り組みの状況などを詳しく聞くことができた。生徒たちは、福山氏の行動力の高さやエネルギーに圧倒されつつも、積極的に質問を投げかけることができた。

第4回 2022年5月28日(土)「第2回オンライン学習」

オンラインで、ゼログラビティ「清水ヴィラ」oceanコミュニティデザイナーの河本雄太氏と繋ぎ、河本氏の活動についてや、奄美大島の観光行政について等のお話を伺った。具体的には、コロナ禍での観光客の増減、海洋ごみの自然への影響、地元の人たちが行っている環境保全対策などについての話を聞いた。河本氏の優しい人柄のおかげで場はすぐになごみ、生徒たちはたくさんの質問をすることができた。



第2回 オンライン学習（5月28日）の様子

第5回 2022年6月11日(土)「問いの設定とアクションプランシートの作成」

班ごとに、現地研修で調べたい「問い」をまとめたアクションプランシートを作成した。このプロセスは工夫が必要であった。最初に生徒達が立てた問い

は、webで検索したり、本を読めば容易に答えが出てくるものが多かったため、このままでは現地研修に行く効果がうすいと担当教員（石川・影山）は考えた。そこで、この過程では生徒と担当教員との間で対話を重ね、生徒たちが現地でしか調査することができない問いを見つけることができるよう、指導を重ねた。



事前学習（6月11日）

生徒たちが、現地で調査したい「問い」を付箋を用いてまとめている様子

第6回 直前研修 2022年8月19日（金）

「出発前の最終確認・勝眞一郎先生の講義の受講」

オンラインで、研修前の最終確認をした。また、奄美大島出身でサイバー大学教授の勝眞一郎先生が作成してくださった奄美大島についての動画を視聴し、現地の状況についてより深く学ぶことができた。

4. 現地研修について

2022年8月26日（金）から29日（月）にかけて、奄美大島で現地研修を実施した。以下がその研修内容の報告である。

1日目 2022年8月26日（金）「羽田空港から奄美大島へ」



羽田空港から航空機に乗り込む



あやまる岬にて記念撮影

羽田から約2時間のフライトで奄美空港に到着し、空港からバスであやまる岬に移動した。あやまる岬を自由に散策した後、奄美市笠利町にあるホテル「コーラルパームス」に到着した。

ホテルでは、現地の自然写真家として活動されている常田守氏、奄美自然観察の森の自然観察指導員の川畑力氏、障がい者が安全、安心に楽しめるマリンスポーツ総合施設「清水ヴィラ」の運営をされている河本雄太氏、奄美テレビディレクターの福山亜希子氏をお迎えし、交流する時間を持った。生徒たちは、現地の方々に直接お会いするのは初めてであったが、事前学習においてオンラインで顔を合わせていた方もいらっしまったため、思ったよりも緊張することなく、スムーズに交流を実施することができた。

生徒たちは、それぞれが事前学習で調べたキーワードに従ってグループに分かれ、現地の方々と自分たちが立てた問いについて話し合いを行った。話し合いを通して、生徒たちは、彼らが事前研修で準備したことを報告し、現地の方から現地研修を行ううえでのポイントを教えていただくことができた。

夕食後に実施されたホテルでのミーティングでは、現地での1日目を終えた感想や、2日目に向けての抱負を話し合った。ミーティング後には、川畑氏がフクロウの鳴き声の真似をしてフクロウを呼び寄せるパフォーマンスをして下さった。生徒も私たちも、本当にフクロウが来るのだろうかとは半信半疑であっ

たが、川畑氏がパフォーマンスを始めると、数分のうちにフクロウがやってきて、川畑氏の鳴きまねに反応し始めた。この様子を見て、私たちは非常に驚いた。そして、奄美大島という場所が、多様な生物たちと共生しているところなのだということを強く実感することができた。

2日目 2022年8月27日(土)

「マングローブパークおよび世界遺産センターの見学」

2日目は朝からバスに乗り、奄美市住用町にある黒潮の森マングローブパークに向かった。マングローブパークでは、マングローブの成り立ちについて詳しく学んだ後、カヌーに乗り、現地のマングローブを間近で見学した。途中で激しいわか雨に降られてしまったが、生徒たちは奄美大島の気候の変わりやすさを肌で体感することができた。生徒の感想で印象に残ったこととして最も多く挙がったのが、この奄美大島特有のスコールであった。



マングローブパークでのカヌー体験の様子

この日は夕方までホテルには帰らない行程だったが、多くの生徒が着替えを持ってきていなかった。奄美大島の天候の変わりやすさを考えると、着替えを持っていくように指導すべきだったという反省が残った。

カヌー体験を終えた後、午後は奄美大島世界遺産センターを見学した。世界遺産センターは、令和4年7月26日にオープンしたばかりの施設で、観光客に

奄美大島の魅力を再認識してもらい、持続可能な利用を促進するための拠点である。広い施設ではなかったが、現地の自然環境についてわかりやすい展示が多数あり、生徒たちはみな熱心に見学していた。

3日目 2022年8月28日(日)

「奄美群島国立公園訪問 瀬戸内町へ 観光船 せと に乗船 清水ヴィラ
ゼログラビティ見学 瀬戸内町役場職員の方々との対話」

この日は密度の濃い一日になった。朝、宿舎のある奄美市笠利町から南部にある瀬戸内町に移動して、観光船「せと」に乗船した。「せと」では、熱帯魚やサンゴを間近で観察することができた。生徒たちは奄美の自然を肌で感じ、みな感動していた。スマホをもって写真や動画を撮っている生徒がほとんどであった。

午後は、障がい者も健常者もマリンスポーツを安全に楽しむことをコンセプトに作られた施設「清水ヴィラ」を訪問した。生徒は車いすに乗って、清水ヴィラの様々な場所にあるバリアフリーの工夫を体感することができた。清水ヴィラでは職員の河本氏より、奄美大島の観光行政の現状や問題についてのお話を伺うことができた。奄美大島で観光業を営むことについて、河本氏から熱い想いも聞くことができ、とても有意義な時間になった。



ゼログラビティ 清水ヴィラでの見学の様子

清水ヴィラの見学後、バスで移動し、瀬戸内町の方々との交流会を実施した。

日曜日にも関わらず、瀬戸内町の町役場の職員の方々が時間を作って下さり、生徒たちの事前学習の疑問に一つ一つ丁寧に答えて下さった。最後は全員で奄美大島の島唄を体験することができた。



瀬戸内町の町役場の職員の方々との対話の様子

夕方は、奄美市内の商店街で自由散策を実施した。グリーンストアという現地のスーパーマーケットをまわり、現地の特産品を見たり、商店街の振興のために働く人たちの話を聞いたりして時間を過ごした。現地のお店には東京では販売されていない商品が多数あり、生徒たちはみんな商品を興味深く眺めていた。

また、現地の方々は私たちの話に耳を傾けてくださり、奄美大島の現状や感じていることを親切に話して下さいました。

夜はホテルで最後のミーティングを実施した。ミーティングには福山氏、常田氏、河本氏、川畑氏、勝先生がいらっしゃり、生徒たちは研修で学んだこと、感じたことを現地の方々にプレゼンテーションをすることができた。忙しい行程の中で、プレゼンテーションの準備をする時間は多くはなかったが、生徒たちはみな研修で学んだことを工夫して伝えることができていた。

4日目 2022年8月29日(月)

「奄美海洋展示館でのウミガメエサやり体験、または奄美大島紬村でのTシャツ泥染め体験」

最終日は、2コースに分かれて体験学習を実施した。1コースは奄美海洋展示館でのウミガメのエサやり体験、もう1コースは奄美大島紬村でのTシャツ泥染め体験である。

【奄美海洋展示館】

奄美海洋展示館には大きな水槽で優雅に泳ぐウミガメ以外にも、大変多くの奄美周辺に生息する海洋生物が展示されていた。その生物すべてが保護育成下にあるということを知り、海の自然の厳しさや人間が与えてしまっている影響などを深く考えさせられる体験となった。ウミガメの餌やりでは大変愛らしく餌を欲しがるウミガメに癒されつつも、保護されたウミガメを海に戻すためにはどのような仕組みが必要なのか、また新たな課題が見えてきたようであった。

【奄美大島紬村】

奄美大島紬村では、Tシャツの泥染め体験のほか、大島紬の織られていく過程も見学することができた。伝統文化の後継者不足の問題についても、紬村職員の方たちからお話を聞くことができた。大島紬が織られていく過程は手作業で、一つ一つの過程が非常に手のかかるものであった。生徒たちは、大島紬の織られていく様子を見て、大島紬が高級品と言われている理由を納得しているようであった。

それぞれのコースの体験後は合流し、全員で昼食会場に向かった。昼食は、「ひさ倉」で、現地の郷土料理である鶏飯をいただいた。

昼食後、少し時間に余裕があったため、原ハブ屋で買い物をする時間を取った。生徒たちは生きているハブを間近で目にし、興奮した様子であった。

原ハブ屋を出た後、バスで奄美空港に到着。昼過ぎのフライトで羽田に戻った。



ウミガメのエサやり体験の様子



Tシャツ泥染め体験の様子

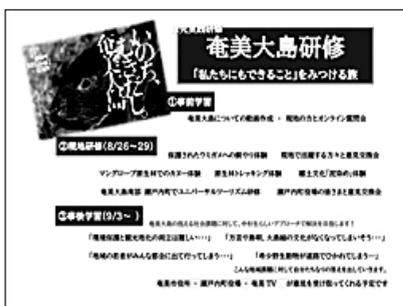
5. 現地研修を終えて 事後研修

(1) 2022年9月3日(土)・9月10日(土)

「アクションプランのプレゼンテーション準備」

9月3日、9月10日の2回の授業では、事後研修を実施した。

生徒たちは、奄美大島が抱えている様々な社会問題について、解決に向けてのアプローチを検討した。また、グループごとにアクションプランシートを作成し、それぞれがアクションプランを提案するプレゼンテーションを行った。そして、その様子を動画にしてYouTubeで公開した。動画のURLをポスターに掲載し、本校の文化祭で公開し、興味を持った方々に視聴していただいた。



本校の文化祭「緑苑祭」で掲示したポスター

生徒たちが作成したアクションプラン（探究実践）は、次の通りである。

- 文化継承は、「奄美の日」制定で解決
- 旧国道封鎖でロードキル対策
- 外来種登録アプリ開発を提案
- 地元中学生に都会不便体験を推奨
- マイノリティに優しい奄美で産業開発
- アニメで方言の衰退危機を救いたい
- 地元密着コワーキングスペースで移住者支援を
- 集落魅力度ランキングで世界遺産を守る

アクションプラン（東京にいる私たちにできること） ※企画や提案

「奄美大島 = マイノリティ(社会的弱者)の方々も楽しめる島」という知名度を作る！



ZERO グラビティ(明本さん)のように、段が低い持っている方々にとって、楽しめる島を作るための提案を結成し、雇用を作る。

具体的なプラン①
 働かずの方々が使いやすいことに配慮されている。ZEROのグラビティ(潜水ボラ)を参考に、働かずでも遊べて奄美大島の伝統文化(足湯)体験ができるような施設やシステムを作ること。



具体的なプラン②
 投資、観光客がいきを持って方々が奄美大島の自然を感じられるようなドローン企画を企画する。

アクションプラン（東京にいる私たちにできること） ※企画や提案

移住者をもっと増やそう！
 私たちは調査を経て、奄美大島には移住者のためのコワーキングスペースが必要であると思いました！

（コワーキングスペースとは？）
 個人事業主やフリーランスで働いている会社員、フリーランスなどいろいろな種類の職種がない場所で働いて収入を得るためのワークスペースのこと。仕事も移住者も集まることにより、仕事も便利で利用しやすくなります。

どのような施設が必要？ それはズバリ！
 働きやすい環境があり、島の人と交流できる場所！！

人がよく通る場所に設置し、内装をオシャレすることで利用しやすくなる
 利用者アンケートは会社員なので、強力なWiFi設備、コピー機やFAXの設置、充電コードの完備などがあればより快適に！
 いろいろな人が利用できるように個室、会議室の両方を設置する
 費れを減らすための休憩所を完備！奄美大島のお菓子や飲み物の用意も…！



環境作りには移住支援金を活用

生徒が作成したアクションプランシートの一例

このうち、「旧国道封鎖でロードキル対策」は内閣府主催の「地方創生政策アイデアコンテスト」一次選考を通過した。また、「アニメで方言の衰退危機を救いたい」³は、日本語学会主催日本語研究コンテストにエントリーさせていただくことができた。

3エントリー作品 https://www.youtube.com/watch?v=ubZ9LVS_EFQ

は車椅子に乗っていたことがあるため、扉を1人で開けて通るのが大変だったことを思い出しました。そのため、部屋の扉をスライド式にしていると言う話を聞き、小さなことにも考えを巡らせることの大切さを改めて感じました。

- 瀬戸内町で披露してくださった島唄に感動した。初めて生で聴いたが、三線の音とリズムがとてもかっこよく、鳥肌が立ち、感動した。YouTubeでなく、生で聴くからこそ、心に響くものがあると思った。
- 事前学習で、世界遺産に登録されるのが延期された時はどんな気持ちだったのか気になり調べました。私は当初、延期になった時、地元の人は悔しかったのかなと思いました。でも一日目の質問で、悔しかったよりは登録されることを島民のみなさんは期待していなかったし、注目していなかったと聞きました。自分の予想とは大きく違いとても驚きました。
- 1日目、地元の方々から生物多様性についての話を聞いたことが印象に残った。多くの意見があったが、多くの人が「地元の人には固有種などの自然に対して特別な感情を持っているわけではない。だから、島外の人が固有種などの自然の素晴らしさをアウトプットすることで島民もその素晴らしさに気づくことができる。」と言っていたことがとても印象に残った。
- 研修に来て良かったと思った瞬間は、3日目のグループごとに3人の方々とディスカッションをさせてもらった後でした。1日目の交流タイムでお話した方々の話とそこで繋がって、私の中で自分のテーマへの考えがすごく深まった瞬間でした。「奄美の1番の魅力は人の面白さ、つながり」、「島を出て、帰ってきたくてもそれなりの報酬がある仕事がないと出たら戻って来られなくなる」、「やりたいことができる島、だけどできないこともある」とい

うようなお話が印象に残っていて、まずは地方と言われる土地では特に雇
を生み出さないと人は増えないのだと実感しました。

- 1日目と3日目の地元の人との交流会は今まで自分が熱心に調べてきたから
こそ、一人一人の言葉がとても刺さったし、濃い時間を過ごせたと思う。私
は世界自然遺産について調べを進めていて、東京でインターネットの中で学
習している中では、奄美は自然遺産になったことでかなり観光地化に向けて
の取り組みも進んでいるし、盛り上がっているのかなと思っていた。しかし、
地元の人との交流の中で、観光業のお仕事をしている人たち以外あまり関心
が向いていなかったり、そもそもどの地域が世界自然遺産になっているか知
らなかったり、世界遺産を外から見るのと内から見るのは全く印象が違うこ
とを知った。でもそれは自然に関心が無いのではなくて、今まで当たり前の
様に自分達の集落を守ろうとしてきた活動（集落清掃など）があるから、そ
の上でまた守っていこうと公式に言われても特に感じることはないのだらう
なと考えられた。それは実際に現地の人と話さないと、思いつきもしない感
覚だったので自分のなかでとても印象に残った。
- 私は、伝統文化と方言を主なテーマとして準備してきました。方言は日本の
歴史を知る上で必要なもので絶やしてはいけな、もっと方言を残す教育を
して行くべきだと思っていました。しかし、実際に聞いてみた方言は全く分
からず、これでは現地の人が本土へ渡った時に苦勞をすることが分かりまし
た。そのため、現地の人に方言の継承を押し付けるのではなく、本土の人も
積極的に方言を残す取り組みをするべきだと思いました。
- 私は今回生物多様性について、外来種との関係から考えてきました。正直、
最初に調べた時は、外来種の駆除に対して、なんでそんな簡単に命をとるよ
うなことをするんだらう、と思いました。でも、実際に奄美の豊かな自然、

生態系を見ていると、外来種によってこれらが失われてしまうのは、本当にもったいないことだな、と感じるようになりました。しかし、そもそも、人が防風のため、ハブ対策のため、といった一面的な視点のみで物事を見てしまった結果、外来種を連れてきてしまったわけで、そこは絶対に変えていくべき部分だと思いました。今入ってきてしまっている外来種への対策は、駆除が中心になってしまうのかもしれないけど、少なくともこれから、また他の外来種を増やさないためにも、より多くの人にこの豊かな奄美の自然を実際に五感で感じて欲しいと思いました。また、多くの方がおっしゃっていたように、現地の人は奄美の自然が身近すぎて、そこまで深く考えていない、ということに対しては、私たちの行動で少しずつ変えていけるところだと思いました。教育といったシステム的な部分に加えて、私たちのような島外の人が奄美について興味を持って、考えて、実際に足を運ぶことで、現地の人が「ああ、自分たちの当たり前のこの景色がこんなにもすごいんだ」と気付ける機会になるのだと思います。そのために、もっと多くの人に奄美大島を深く知ってもらえる機会があれば良いと思いました。

7. 研修を実施して分かったことや反省

今回の研修を通して引率者（石川・影山）が感じたことを記す。

参加生徒の多くは、自分たちがここまで地方課題と向き合う探究実践に熱中するとは思っていなかったようだ。参加動機の多くは「自然に癒されたい」「自然の魅力を感じたい」というような簡単なものだった。しかし、研修を進める中で現地への関心や疑問が溢れ出てきて、訪れる前に奄美大島のファンになっていた生徒も多かったように感じる。

特に大きな影響を与えて頂いたのはオンライン企画で生徒と話をしてくれた福山氏(奄美テレビ)と河本氏(Oceanコミュニティデザイナー)であったと思う。情報が容易に手に入る時代だからこそ、実際に現地で暮らす方々とのリアルなコミュニケーションに参加生徒は大きな刺激を受けたようだ。

研修準備の中で工夫が必要だった点は、やはり「問いの設定」であったと考えられる。疑問は多く認識できるが、それを「問い」の形にすることが難しかったようだ。最初は、すぐ正解に辿り着けそうな安易な「問い」を設定してしまうグループが多かったが、最終的に正解のない(または正解が複数ある)問いを設定することが出来、そこから探究の姿勢を学べたことはかけがえの無い経験になったことであろう。

「自然が魅力」だと感じて参加した生徒だったが、研修を終えると「自然と共生する人が魅力」と感じ方に変化が生まれたようだ。このように「現地に訪れることで初めてわかることがある」という経験を今後の探究学習の中でも大切にしたい。

(石川 茂典)

生徒たちは事前学習を通して様々な問いを立て、現地研修に臨んだ。生徒の立てた問いが、現地でお会いしてお話を伺った人たちのご専門の分野とマッチしていると話が盛り上がり、とても有意義な時間を過ごすことができた。一方で、生徒たちの立てた問いに対して明確に答えられる方がいなかったケースもなかったわけではない。例えば、ある生徒は「奄美大島の学校教育や子どもの様子について」を事前学習で学んで現地に行ったが、現地で中高生に出会う機会はほとんどなく、せっかく問いを立てたのに現地で十分に調査ができなかったということも起こってしまった。次回の研修ではそういったことを減らしていきたいと思う。

また、今回の先行実施は29名での研修であった。しかし、2023年度の実際の研修旅行は76名の生徒が参加予定である。研修旅行は今回の先行実施の二倍以上の規模で動かなければならないため、臨機応変の対応が難しくなる。70名以上の生徒をどのように引率するのかについても、これから再度検討が必要になると感じている。

また、私は現在1年生(60期生)の担当をしているが、60期生は生徒全員が

入学時からchromebookを持っており、それを使って探究学習を続けてきているため、プレゼンテーションのスキル等が飛躍的に向上していると感じる。1年後の研修旅行では、このようなスキルをさらに活かせるような場面を作りたいと考えている。

生徒たちの感想からは、課題解決のためのアクションプランの提案を通して、今後も奄美大島の活動に興味を持っていきたいとか、実際に社会に働きかけられるようになりたい等の意欲的な姿勢が伝わってきた。この研修が、生徒の今後の生活の変化や進路選択に良い影響を与えることを願ってやまない。

(影山 彰)

**この奄美大島研修は、
2023年度 第60期生 研修旅行として続きます。**

2022年度研修生（58期59期生）が挑戦したこの研修は、60期生から3コース研修旅行として継続されます。奄美大島をフィールドとした探究実習は皆様たちがしっかりと引き継いでくれます。

皆さんはまた違うフィールドで、新しい「挑戦と体験」をしてください。

行動すること、実際の現場を訪れることの大切さを知った皆さんなら、多くの社会課題に挑戦できるはず。ひとりで、ふたりで大きな力を発揮して、また、奄美大島を訪ねることができたら最高ですね。さばりんしゃーれ！

